ISSN 2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて

第72号 2020年12月15日

編集・発行『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人 冨岡勝・谷本宗生）
連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 冨岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム 科学技術の倫理をめぐる18本の論考	冨岡 勝	2
逸話と世評で綴る女子教育史（72） 貴婦人学校 ― 東京女学館開校	神辺 靖光	8
学校資料の教材化を模索して⑯ ― 学校内の写真撮影・プレゼン発表を事例に ―	八田 友和	12
明治後期に興った女子の専門学校（27） 番外編 ― 看護婦教育はナイチンゲールから	長本 裕子	15
カレッジノベルの研究への道（18） ：久米正雄「受験生の手記」（9）	吉野 剛弘	19
体験的文献紹介(20) ― 閑話休題Ⅰ 東京の私立女子高等学校 ―	神辺 靖光	23
刊行要項（2015年6月15日現在）		27
短評・文献紹介		28
会員消息		29

コラム
科学技術の倫理をめぐる18本の論考

冨岡　勝（とみおか　まさる）
（近畿大学）

PR誌を手に取って

12月に、研究室のテーブルにあふれかえっていた本の山を少しだけ片付けたときに、表紙に「特集　科学技術の倫理」と書かれた『世界思想』47号（2020年4月）が目に留まった。1967年から毎年作られている世界思想社のPR誌で、18名の論者による4～6頁ぐらいの論考が合計88頁収録されている。日本学術会議の問題や、形骸化しつつある大学自治について考察する上で、科学技術の倫理について勉強しておくのも有益なのではないかと思って読み始めたら、止まらなくなってしまった。

特集テーマに沿ってこれだけの数の論考が並ぶので、各執筆者がそれぞれの特長を出そうとして結構気合いを入れて書いたのではないか、と読み進めていくうちに感じた。本を10数冊読むのは結構大変だが、90頁弱の小冊子を読むだけで、このテーマについての一種の見取り図を得られるのなら、お得かもしれない。

18本のタイトルと概要

「科学者の倫理」「歴史と想像力」「来たるべき世界」の小テーマで構成された18本の論考の執筆者、専門分野、題目をリストアップするとともに、各論考のごく簡単な要約を作ってみた。

［科学者の倫理］

① 野家啓一（科学哲学）「リスク社会における科学技術倫理」

② 池内了（宇宙物理学）「科学者の倫理と役割」

③ 仲野徹（病理学）「医学・生命科学研究における研究倫理」

④ 鈴木和歌奈（科学技術の人類学）「小文字の倫理 ― 知ることとケアすること」

⑤ 島薗進（宗教学）「宗教文化と生命観 ― いのちを作りかえる科学技術を制御する倫理」

［歴史と想像力］

⑥ 佐倉統（科学技術社会論）「科学技術は暴走しているのか？」

⑦ 長山靖生（文筆家）「ゴジラに見る日本人の科学技術観、倫理観」

⑧ 戸谷洋志（技術の哲学）「科学技術と想像力 ― ビクティニとトピカ」

⑨ 児玉聡（英米思想、倫理学）「誰の幸福のために？ ― ヒト胚のゲノム編集をめぐって」

⑩ 陣野俊史（文芸評論家・フランス語圏文学者）「科学的『正しさ』の権威とゆくえ ― サッカーのVAR導入から見えるもの」

⑪ 福永真弓（環境社会学、環境倫理）「リスクがつくる肉食のかたち」

⑫ 藤原辰史（農業史、食と農の思想、ドイツ現代史）「重装備社会の農業」

［来たるべき世界］

⑬ 若林恵（編集者）「さよなら現金。さよなら民主主義」

⑭ 高野麻子（歴史社会学、移動研究）「生体認証技術の発展と未来 ― 認証される『私』とは誰なのか」

⑮ 斉藤健一（日本ハッカー協会監事）「ハッカーが活躍できる社会に向けて」

⑯ 櫛島次郎（科学技術文明論）「楽園前夜または『中間世代』を生きる ― 文明論としての科学技術の倫理」

⑰ 澤井努（生命倫理学）「体外で作製される脳は意識を持つのか ― ヒト脳オルガノイド研究の倫理」

⑱ 池上高志（複雑系の科学）「ALIFEと生成される倫理」

野家による①はU・ベックが提唱した「リスク社会」を取り上げている。科学技術がリスクの源泉となっている「リスク社会」では、健康や環境に深刻で不可逆的な被害の恐れがある場合、科学者や行政官は十分な科学的確実性がなくとも予防措置をとることが求められていると指摘している。

池内は②で、科学が文化のためでなく経済などと結びつけて強調されるようになったために、科学者の規範が変化していると述べる。そして、この変化に関連した状況として、防衛装備庁の委託研究制度への若手研究者層の歓迎傾向の危うさを指摘する。

仲野の③は、共著者の研究不正を見抜けなかったために仲野氏自らが研究不正に連座してしまったという経験を紹介しながら、生命科学の分野における研究不正防止の難しさを指摘している。

鈴木は④で、iPS 細胞を扱う実験室をフィールドワークとした観察結果を例に挙げながら、熟練した科学者は、科学に対する規範的な責任・倫理だけでなく、研究対象との関わり方によっては特有の倫理を持つようになる可能性があることを指摘している。

島薗の⑤は、ヒト胚ゲノム編集によって、人類のゲノムレベルでの多様性縮減や差別・格差拡大などの長期的な影響がもたらされる可能性があることを指摘する。そして島薗は、生命のつながりを重視するアジアの宗教文化を踏まえ、より広範で長期的な影響を考慮する生命倫理を構築することを問題提起している。

佐倉の⑥は、これまでの歴史のなかで科学技術が暴走を繰り返してきたことを、農耕を例に挙げながら説明する。そして、従来の技術とは大きく異なるAIやロボットなどの先端技術についても、人類はどうにかして手なづけ、飼い慣らしていかなければならないと述べる。

長山の⑦は、1954年以来半世紀以上にわたって断続的につくられてきた怪獣ゴジラに関する映画に、1954年のビキニ環礁での核実験と第五福竜丸・第十三栄光丸の被曝、2011年の福島第一原発事故処理問題などの問題への解釈が込められ、人々に様々に論じられてきたことを紹介している。

戸谷は⑧で、科学技術に対する想像性の必要性という意味で科学的知性である「クリティカ」だけでなく、常識に立脚する知性である「トピカ」が重要であると指摘し、「トピカ」の代表例としてアニメのポケットモンスターに登場する「ビクティニ」というキャラクターについて考察している。

児玉の⑨は、遺伝学が第二次世界大戦終了後に目覚ましい進歩をとげ、とうとうヒト胚のゲノム編集に至っていること述べた上で、このゲノム編集と子どもの幸福についての議論を紹介し、ゲノム編集の規制について専門家や市民の間でよく検討する必要であることと、規制のためには国際協調が必要であることを指摘している。

陣野俊文は⑩で、審判の役割が重視されてきたサッカーにおけるVAR（ヴィデオ・アシスタント・レフェリー）導入に至る議論を紹介し、今後の人間の審判の役割について問いを発している。

福永は⑪で、生活習慣病のリスク、気候変動や環境汚染のリスクなどからインポッシブルミートとよばれる植物性人工肉のメニューが米国のベイエリアに登場していることを紹介している。そして、植物性人工肉は、消費者からみれば生産過程を知ることが難しいため一種のブラックボックスとなって人々の自由度が狭まり、市場と専門家への依存度アップにつながると指摘している。

藤原は⑫で、石炭による蒸気機関の利用、石油エンジンのトラクターへの転換など、農業の重装備化の歴史を振り返りながら、重装備の社会は方向転換がしにくく、思考が硬直化しやすいと指摘する。そして原点に返って、誰もが関われる小規模軽装備農業を新産業として整備することを提案している。

若林の⑬は、インターネット上の商取引で使われ始めたデジタルマネーが、個人のIDと商取引を一体化させるものであるために、現金のもっていた匿名性という都市や民主主義を支えてきた機能を失わせることになる指摘している。

高野の⑭は、指紋・静脈・虹彩などによる個人認証だけでなく、顔や歩き方の特徴で認証するなど、急速に発展しつつある生体認証技術

の暴力性を指摘する。

斉藤の⑮は、情報セキュリティを高度なレベルで担う人材、つまり「倫理的なハッカー」の育成が課題となっていることを指摘している。

櫛島は⑯で、百年単位の時間を要する系外惑星探査が将来行われるときに問題となる、生涯を宇宙船内だけで過ごす「中間世代」について考察する。その上で、この「中間世代」の視点は現代の科学述の倫理を考える上でも有効なのではないかと問題提起している。

澤井は⑰で、ヒト脳オルガノイド（iPS 細胞や ES 細胞などを使って体外で人間の脳を模倣した三次元構造を作製したもの）が提起する倫理上の問題をしている。

池上の⑱は、ALIFE（Artificial Life 、日本語に訳すと「人工生命」）が将来、自律性をもつようになったとき、人間社会特有のものであった倫理は変更を迫られるのではないか、という問題提起をしている。

得られた見取り図

この18本の論考から私なりに読み取った簡単な見取り図を次のように素描してみた。

現代では科学技術は経済や社会と深く結び付き、科学技術者の倫理は社会の人々すべてに大きな影響をもつが、科学技術者の倫理・規範を支える基盤は経済や政治の影響を受けて危うくなっている（①②③）。一方で、研究対象との関わりのなかから新たな倫理が生まれる可能性もある（④）。

また、先端技術はこれまで以上に暴走してさまざまな問題を引きおこす可能性があり（⑥）、先端技術の暴走を防ぎながら活用していくための科学技術者の役割は一層大きくなっている。一方で、科学技術を制御していくためには、科学技術を使いこなす人材の育成（⑮）とともに、幅広い市民が科学技術について理解し考えていくことや（⑤⑦⑧⑩）、科学技術に関する国際協調が必要である（⑨）。そのためには、科学技術の重装備化やブラックボックス化を見直していく

視点を持つことも必要である（⑪⑫⑬）。

そうした科学技術について専門家と市民がともに考える取り組みを続けながら、未来の科学技術が引きおこすであろう諸課題に対応する準備をするべきである（⑭⑮⑯⑰⑱）。

以上のように科学技術の倫理について展望することで、科学技術の重要な現場である大学の役割の大きさに改めて気がつくことができた。

より多くの人々と対話・交流しながら、このような見取り図を更新し続けていきたい。

＊このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています。

逸話と世評で綴る女子教育史（72）

貴婦人学校 ― 東京女学館開校

神辺（かんべ） 靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

明治21年9月、麹町区永田町の俗に言う雲州屋敷（出雲国松江藩の上屋敷）に東京女学館が開校した。雲州屋敷とは歌舞伎「天衣紛上野初春（てんにまごううえのの）」で河内山宗俊が見えを切るあの雲州屋敷である。当時宮内省が所轄していたものを東京女学館に払い下げたのである。

外山　正一

東京女学館は帝国大学文科大学教授・外山（とやま）正一、内閣総理大臣・伊藤博文、実業家の渋沢栄一、三菱会社社長・岩崎彌之助の主導ではじまった。外山は幕臣の生まれで蕃書調所から英国に留学し、明治維新で帰国後、静岡藩学問所教授、政府に呼ばれて東京大学文学部教授、続いて文科大学教授になった。後に帝国大学総長、文部大臣になるが、英語英文学から西洋史、心理学、社会学にいたる広い学問に通じていた。そして教育一般について知識を持ち発言した。その彼が“日本の貴婦人をして欧米諸国の貴婦人と同様なる教育を受けしめる”趣旨で女子教育奨励会を企てたのである。外山はこれを内閣総理大臣・伊藤博文に持ち込んだ。外山は当時、帝国大学文科大学長である。帝国大学は文相・森有礼によって作られたが、これは伊藤総理大臣の意向によるものである。外山と伊藤は繋がっていた。大久保利通から政権を受け継いだ伊藤は憲法制定に動き出すが、当時の太政官政府には無能無策の公家や旧大名の高官がいて困った。そこで新しい貴族制度である華族令を設けて彼らを公・侯・伯・子・男爵にして祭り上げ、実際の政権から遠ざけた。時に幕末以来の不平等条約改正が重要問題になり、西洋諸国と交際を密にする

渋沢　栄一

一方策として鹿鳴館で舞踏会やバザーを盛んにおこなった。これに華族の夫人や令嬢を誘ったが公家や旧大名の夫人や令嬢は怖(お)じけづいて出てこない。仕方ないから市井出身の新閣僚の夫人などによって鹿鳴館の諸行事が行われたのである。期待された新設の華族女学校の生徒も退嬰(たいえい)的であった。長年、宮中や大名屋敷の薄暗い大奥で暮らすと人間の血液は濁(にご)るのであろう。ここは古い血をあきらめて下級武士出身の新官僚や庶民出身の会社員の夫人息女に新しい社交をまかせたい。伊藤の考えは大方こんなところであったろう。外山の提案を受けた伊藤は実業界の指導者・渋沢栄一、岩崎彌之助と語らって女子教育奨励会をつくった。後に渋沢はこの会について“旧(ふる)い日本は女性を表に出さないから日本の人口は半分はいないも同然だ。欧米は男女同権どころか女尊男卑で天文地理経済法律道徳すべてわかっている。何事もわかる西洋婦人となにもわからぬ日本婦人は交際できぬ。そこで欧米の婦人と社交のできる女子教育奨励会をつくったのだ”と述べている。こうして伊藤、外山、渋沢、岩崎の四人を筆頭に政界・学界・実業界の錚々たるメンバー22名によって明治22年1月、女子教育奨励会が作られたのである。1月12日、伊藤博文邸に集った奨励会発起人は22名、前記4名の外、帝国大学総長・渡辺洪基ほか帝大教授6名、高嶺秀雄高等師範学校長、伊沢修二東京音楽学校長、神田乃武外国語学校長等、学界教育会の最高スタッフが顔を揃え、また宮中顧問官や英国聖公会の外国人司教も加わっている。この発起人会で奨励会を実際に動かす評議会員が決った。伊藤博文は総理大臣ゆえ奨励会から退き、宮内大臣・土方久元が評議会長になり、発起者の外山、渋沢、岩崎の外、高嶺、伊沢、神田等9名の名士が評議員になった。さらに名声と基金募集のためであろう。会長に北白川宮能久(よしひさ)親王を推戴し、有栖川宮熾仁(たるひと)親王妃董子以下華族夫人十数名を副会長にしている。何とも大げさな陣容である。明治21年2月21日の『郵便報知新聞』は言う。

伊藤伯、土方子並に岩崎、渋沢等の諸氏其他朝野内外紳士の計画に係る女子教育奨励会の女学校は今度愈々赤坂門内旧雲州屋敷の中に設けることとなり同校の教師となるべき婦人6名は既に英国を出発し、三月中旬には来着の筈なれば右教師等来着の上は早々生徒を募集して授業を始むる都合なりと。右の婦人は此まで英国に於ても高等なる女学校の校長又は教授たりし人々にて中にはケンブリッジ大学校の卒業生も有りと言ふ。同校にては通常の学科は申すまで

もなく、就中家内衛生家事経済並に礼式修身等の事には最も注意する由又同会に於ては学校と連続して貴婦人の倶楽部を起し、生徒たらざる婦人と雖も西洋風の生活、礼式、交際、家事等の模様を知り得るの道を開くべき計画ありと。

学校設置資金として10万円をあげ、その半額5万円は官途にある者が負担し、残り5万円は民間に募集する。10万円の原資金は1株250円で400株に分け、うち200株は華族と官吏が、あとの200株は民間の有力者が責任を持つというものである。同年9月の開校時までに約5万円ぐらいの株式になったというから出足は好調といってよいだろう。

明治21年4月27日付、土方久元の名でつくられた「女子教育奨励会東京女学館規則書」なるものがある。(『東京女学館史料第8集』所収)。冒頭「本館ハ日本婦人ヲシテ欧米ノ婦人ノ享有スル所ト同等ノ教育及家庭ノ訓練ヲ受ケシムルヲ以テ目的トス」とあり

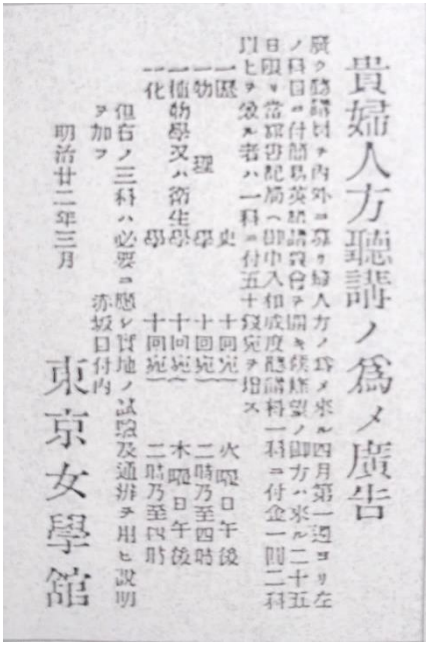
普通科…本邦語学史学及ヒ文学・本邦学士担当ス　史学外国文学理化学数学・右ハ英語ヲ以テ教授ス

特別学科…音楽図画衛生法裁縫縫箔看護法舞踏及ヒ体操ノ如キ実地ノ技術ニ系ルモノハ特別学科トシテ之ヲ授ク

土方　久元

とある。普通科は男女共通の教育、特別学科は女子特有の学科という意味であろう。入学年齢を「満十一歳以上」とし、予科3学年、本科3学年として国語・英語・数学・音楽・裁縫等の教科を割り振っている。教師はシーカルクス夫人以下7名の英国婦人の名があがっているだけである。また「寄宿生規則」もあり「館内ノ生活ハ英国中等以上ノ社会ノ風ニ則ルベシ」以下、寄宿舎生活の規則がこまごまと記されている。学費は普通科授業料毎月2円50銭、洋琴(ピアノ)1円、寄宿寮15円、通学生昼食15銭であった。開校当初の生徒数は普通科本科1年8名、予科2年13名、予科1年2名、特別科10名、選科9名、計42名であった。

東京女学館には「日本婦人ト英国婦人トノ間ノ交際ノ中心ト成リ有益ノ事業ヲ奨励スルヲ以テ目的」とする倶楽部があった。女子教育奨励会員の家族はこの倶楽部会員になれるが奨励会員2名の紹介があれば誰でも倶楽部会員になれる。倶楽部会員は水曜日午後2時から4時まで東京女学館の客室を使って裁縫や唱歌・英語を学ぶことができるし、庭園をつかって夏はテニス、冬は体操や舞踏をすることができる。また女学館の授業のうち、割烹、図画、裁縫、英語、衛生学等に出席することもできる。会費は一ヶ月1円である。要するに女子教育奨励会員の家族周辺の女性教養倶楽部をつくろうとしたのである。その対象は鹿鳴館時代のような公家大名家族の妃姫ではない。漸く育成された官僚や会社の家族、または上層の東京市民の妻女である。彼らはこれを“貴婦人”と呼んだ。新しい名称である。女子教育奨励会規則第1条には「本会ノ目的ハ日本ノ貴婦人ニ欧米諸国ノ貴婦人ト同様ナル佳良ノ教科及家事ノ訓練ヲ受ケシムルニアリ」とある。東京女学館の「私立女学校設立願」は明治21年6月20日付で東京府知事高崎小六に提出された（東京都公文書館蔵）。


貴婦人方聽講ノ爲メ廣告

東京女學館

参考文献『東京女学館百年小史』
渋沢栄一「東京女学館二十年紀年祝典に於ける演舌」（東京女学館史料 第2集）
「東京女学館倶楽部規程」（東京女学館史料第5集）

学校資料の教材化を模索して⑯

―学校内の写真撮影・プレゼン発表を事例に―

はった ともかず
八田 友和(クラーク記念国際高等学校)

1. はじめに

本稿では、筆者の勤務校で行った校舎全体を活用した教育活動について、その概要を整理・提示する。筆者の勤務校であるクラーク記念国際高等学校芦屋キャンパス（以下、芦屋キャンパス）は 1992 年にクラーク高校の第1号キャンパスとして開学した。その後に在籍した諸先輩（生徒・教員）たちの長年にわたる努力によって培われた校風を、現在の在校生たちが継承し、協力し合って、時代に即したよりよい形に発展させてくれている。しかし、それを身近に感じる機会や、意識する機会はほとんどないといっても過言ではない。

以上を踏まえて、実際に校舎を歩き、印象に残っている場所を写真で撮影し、視覚的に捉えさせることで、歴史や伝統、校風を身近に感じることを目指した実践を行ったので、その概要を整理する。

2. 授業の概要

本実践の概要は次の通りである。

(1) 科目名：小論文（学校設定科目）
(2) 期 間：2020 年 10 月 8 日（木）9:30－10:20
(3) 場 所：クラーク記念国際高等学校 芦屋キャンパス
(4) 担 当：筆者、石川眞椰
(5) 生徒数：8 人
(6) 授業の流れ・方法

まず、本時の目標（校舎を歩き、お気に入りの場所を撮影すること）について説明を行った。その後、教員が引率し、実際に校舎内を歩いた。生徒たちは、部活動やゼミ活動、授業などで使用した教室やグラウンドを巡り、写真撮影を行った。

その際、「毎朝、ここで掃除をしています」「部活動の時、この坂で走り込みをしています」などの会話を交わしていた。普段何気なく、使用している教室やグラウンドを、自分のエピソードと重ね合わせたうえで他者に紹介する機会となった。その後、教室に戻りアプリ（slack）を介して、お気に入りの写真を筆者に提出させた。今後の展開として、パワーポイントに自分の撮影した写真とエピソードをまとめて、発表する機会や小論文にまとめる機会を設定することを予定している。以下は、生徒が撮影した写真の一部である。

（左上写真）
グラウンドの写真

（上写真）
卓球用ボール

（左写真）
パフォーマンスルーム

3. 考察

本研究の成果として、印象に残っている身近な場所を取り上げ、視覚的に捉えさせることにつながった点があげられる。普段何気なく参加している部活動やゼミ活動を振り返り、印象に残っていることを自分の口で語ることによって、表現力を向上させる練習にもなったと考えている。

一方で課題として、先輩たちが受け継いできた伝統や歴史を考えるところまで学習が進まなかったことが挙げられる。普段の生活を意識的に振り返ることには成功したものの、伝統や歴史を考えるところには至らなかった。現在、キャンパス

内で進んでいる 30 周年の周年行事に向けた活動において、未達であった部分については触れていきたいと考えている。

4. おわりに

本稿では、校舎全体を活用した授業実践について整理・提示を行った。芦屋キャンパスは、来年度開校 30 周年を迎える。30 年間で培ってきた伝統や歴史は、諸先輩方から現在の在校生・教員・保護者に受け継がれている。今後は、それら伝統や歴史を活かした次の 30 年を模索していく必要がある。そのきっかけとなる開校 30 周年の周年行事に向けて、生徒たちと企画・運営を行っていきたい。

【謝辞】

本稿を執筆するにあたり、クラーク記念国際高等学校の石川眞椰氏にお世話になりました。記して御礼申し上げます。

【参考文献】

・村野正景・和崎光太郎（編）2019『みんなで活かせる！学校資料ー学校資料活用ハンドブックー』学校資料研究会

・島田雄介・神野晋作・八田友和 2018「学校所在資料の活用～学校現場に聴く～」『考古学研究』第 64 巻 3 号, pp.10-19

・文部科学省 2019『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説ー地理歴史編ー』東洋館出版社

明治後期に興った女子の専門学校（27）

番外編―看護婦教育はナイチンゲールから

長本（ながもと） 裕子（ゆうこ）(ニューズレター同人)

明治時代における看護婦教育は、学校教育政策ではなく、病院に付属する養成所としての位置づけであった。明治7年の「医制」においてもふれられておらず、産婆教育よりも遅れた。

明治時代初期のころまでは、病人の世話は家庭内で女性が行うのが当然とされていた。明治元年、新政府の要請により、横浜軍陣病院で英国人医師ウィリアム・ウィリスが戊辰戦争の傷病兵の治療に当たった。開設時7名であった負傷兵が9月には207名になった。この時病人の世話をする介抱女として50歳以上の既婚婦人が雇われ、賃金が支払われた。しかしまだ専門的な教育は受けておらず、経験に基づく看護であった。これが、看護が一般に認識されるきっかけとなり、10年の西南戦争以降、日清・日露の戦争や災害時の救護活動を経て、女性の職業として確立されるようになる。

我が国最初の看護婦教育は、18年、高木兼寛（海軍軍医少監）が、有志共立東京病院に日本初の看護婦教育所を設立したことに始まる。高木は、米国長老教会から宣教師として来日していたM.E.リードに指導を依頼した。高木は、かつて英国留学中に、ナイチンゲール看護学校を付設する聖トーマス病院医学校で学び、看護の重要性を認識していた。

リードは、米国でナイチンゲール看護婦教育を受けていた。ナイチンゲールはクリミア戦争時、聖ヨハネ兄弟会の看護団として従軍し、病室の改善や看護管理を行い、傷病兵の死亡率を42.7%から2.2%に激減させた。感激した英国民から寄付金が寄せられ、ナイチンゲール看護学校創始の財源となった。ナイチンゲール方式は、看護学校を病院に付属させ、「見習い制度」で推進する。優れた人格形成をめざし、知性、倫理、実践において最上のものを患者に惜しみなく与え

る。訓練・組織化し、職業的自立、精神的自立を促し、女性が社会的に有用であることを証明するというものであった。英国全土に広がり、世界に広がった。

リードは、2、3ヵ月間病院で実地を見習わせたのち、試験によって適性が認められた者に入学を許可した。修業年限は2年間、教育内容は、解剖、生理、看護法などの学説と、実地として解剖、包帯、巴布製法などが教授された。1期生5名は21年2月に卒業し、派出看護に従事し、給料が支給された。病院内の業務は、婦長と1、2名の補佐と在学生徒があたった。

この教育所の設立については、陸軍卿・伯爵大山巌夫人捨松が活躍した。捨松は、明治4年に岩倉使節団とともに官費米国留学した5人の少女の一人山川捨松である。捨松はヴァッサーカレッジ卒業後、コネティカット看護婦養成学校で2ケ月間学んだ。有志共立東京病院を見学した時、雑用係の男性が病人の看護をしている様子を見て、高木病院長に看護婦養成の学校設立を提言した。しかし、資金がないという返答に、捨松は婦人慈善会を結成し、鹿鳴館で日本初のチャリティーバザーを3日間開き、収益金8,000円を寄付した。そして19年1月、看護婦教育所のレンガ造りの建物が落成した。

2番目は、19年4月に設立された同志社病院の京都看病婦学校である。設立者は新島襄、病院長はジョン・ベリー。ナイチンゲールのもとで研修を積んだアメリカ人宣教師リンダ・リチャーズを学校長として迎えた。看護を通してキリスト教の伝道を目標とした。就学期間は2年間で、生徒はナースホームに居住し、学科目の勉学と、病院の看護婦として8時間3交代制で業務に携わりながら教育を受けた。授業料は無料、寮費は月約2円50銭。23年新島が急逝。39年、経営難から同志社病院と看病婦学校は廃止が決定した。しかし、看病婦学校は、30年から管理を任されていた医師佐伯理一郎が引き継ぎ、佐伯病院内に移された。佐伯はナイチンゲールに会った4人の日本人の一人である。ちなみに他の3名は、石黒忠悳（ただのり）、津田梅子、安井てつである。

19年11月、米国人マリア・ツルーが桜井女学校（現在の女子学院の前身）内に看護養成所を設け、1年課程の養成を始めた。キリスト教精神によって教育

され、看護を通して伝道を志す。ナイチンゲール方式のエジンバラ王立救貧院病院看護学校を卒業した英国人アグネス・ベッチが指導にあたった。20年10月、1年間の講義を終えた卒業生6名が帝国大学医科大学付属第一医院に実習生として受け入れられた。これが付属第一医院看病法練習科（修業年限1年）の始まりである。この実習生の中に、後に看護婦長となり、後進の教育や婦人運動にも携わる鈴木雅子や大関和がいた。ここでもベッチが指導にあたった。21年2月、数十名の付添看護婦を募集する。22年には付属看病法講習科と改称し、修業2年間とする。31年、婦長養成のため高等看病法講習科を開設し、18名が入学したが、1回限りで終了した。複雑な変遷を経て、東京大学医学部付属看護学校となるが、平成14年に閉校。

23年4月、日本赤十字社看護婦養成所（修業年限1年半、26年から3年半、29年から3年）が設立され、10名を入学させた。当初は1年半の修業後、2年間の病院業務と20年間の召集に応じる義務があった。ナイチンゲール看護学校の教育を模範とした。26年京都・大阪・広島に支部看護婦養成所が開始される。27年6月、日清戦争時に救護班を編成、各地に派遣する。日露戦争時には赤十字船や内地の陸軍病院等に派遣された。日清・日露戦争での日赤看護婦の活動が看護婦の社会的地位を確立した。

明治中期に始まった我が国の看護婦教育は、ナイチンゲール方式に基づき、日赤以外は、キリスト教宣教看護婦によって指導された。しかし、当初の指導者が帰国したり、日清戦争後、量的に看護婦が求められたりして、生徒の質が低下し、ナイチンゲールの看護婦教育レベルを維持できなかった。日本では女性が見知らぬ男性に付き添って看護するなど良家の子女のすることではないという観念が根強くあり、看護婦に対する軽蔑や偏見は長く続いた。

帝国大学医科大学の医局は、医師の教育が中心で、付属医院の看護婦を確保することしか考えていなかった。当初のモラルに欠けた看護人や付き添い看護人らが働いていたため、婦長になった大関や鈴木は取り締まりに苦労した。これを不満として大関は23年冬、鈴木は24年に辞任し、鈴木は我が国初の派出看

護会となる慈善看病婦会を興す。大関も後に大関派出看護婦会を設立して、看護婦の養成と普及につとめ、看護婦矯風会を組織する。偏見にさらされていた看護婦のイメージアップを図ろうとした。

明治後期にかけては、病院整備も進み、各地で看護婦の養成が行われるようになったが、入学資格、修業年限、学科内容は一定していなかった。東京府は33年7月、「東京府看護婦規則」を公布し、取り締まりに動き出した。

> 満20歳以上（大正3年の改正で18歳）の女子で、東京府の看護婦試験に合格の上東京府の看護婦免許を受けなければならない。

試験制度が導入された。ただし、この規則公布前に2年以上看護婦業を営んでいる者は、6カ月以内に願い出れば、無試験で免許が下付されるとした。

しかし、看護婦の増加が見込めず、34年看護婦規則を改正。官立、府県立で3年以上の修業年限を有する看護婦養成所又はこれと同等以上の学科程度を備えた看護婦養成所の卒業証書を得た者で、願い出た者に対し、審査の上試験を免除し、免許を下付することとした。このように、大正4年に「看護婦規則」が制定されるまでは、各府県が取り締まっていた。

吉岡弥生は大正年間から若干の看護見習生を置き、約2年間の見習い期間を経て、学外の夜間看護婦養成所に通わせ、看護婦試験合格を目指させた。さらに1年間産婆学校に通わせ産婆試験を受験させた。当時看護婦の社会的地位は低く、経済的な自立も困難だったため、さらに有利な産婆の資格を身につけさせようという意図であった。こうした弥生の思いは平成10年、弥生の郷里静岡県小笠郡大東町に東京女子医科大学看護学部の発足として結実する。

参考文献

『東京女子医科大学百年史』

『看護史』系統看護学講座別巻9

『資料にみる日本看護教育史』平尾真智子

「ナイチンゲールの看護教育方式を取り入れた我が国の明治期という時代」佐々木秀美

カレッジノベルの研究への道（18）
：久米正雄「受験生の手記」（9）

吉野（よしの） 剛弘（たけひろ）（埼玉学園大学）

前号に引き続き、今号でも「受験生の手記」を恋愛譚という側面から検討する。

家庭博覧会の後、しばし澄子とは疎遠になっていたが、入学試験を終えて、直接対面するときがやってくる。なお、健吉の見立てでは、この間に健次と澄子との関係に変わった様子はないということになっている。以下に示すのは、入学試験が終わって姉の家を訪れた際に、澄子がやってきたところである。

> 暫くしてゐる間に姉は、二人を残して台所の方へ立つた。私と彼女とは、改めて対ひ合はねばならなかつた。息づまるやうな切迫が私の胸を押した。私はそつと彼女を見やつた。そして彼女の視線と打突かると慌てゝ眼を伏せた。凝固したやうな沈黙が、私にはわざとらしく感ぜられた。何か云はなくちやならないと思つたが、自然に唇がほどけなかつた。とうとう彼女が口を切つた。
>
> 「今日は大変沈んでいらつしやるのね。どうかなすつたの。」
>
> 「いゝえ、何でもないんです。」
>
> 「ほんとに何でもないの。」かう云つて彼女は、首を傾げて覗くやうにした。
>
> 私の心の中で、又、「今だ。」と囁くものが在つた。「今こそその時だ！」私は上眼遣ひに彼女を見て急いで睫毛を伏せながら、低く云ひ始めた。
>
> 「ねえ澄子さん。貴方この間の事を怒つていらつしやるんぢやありませんか。さうだつたらどうか許して下さい。僕は何も、どうする気はなかつたんですから。」
>
> 「この間の事つてなあに？」彼女は私の急に変つた態度を驚きながら、私の調子に釣られて声を低めた。
>
> 「博覧会の中で、あんな事をしたのは僕が悪かつたです。あんな事をして、貴方はさぞ、私を卑しい奴だと思つたらうと考へると、僕は穴にでも入りたくなるんです。どうか僕を悪く思はないで下さい。」

「あの事？ あの事なら、何とも思つてやしなくつてよ。只私、叱驚しただけだつたのよ。だつて余り突然なんですもの。ほんとにそれだけよ。」こゝで彼女は更に声を落してつゞけた。

「私ほんとは嬉しかつたのだわ。」

「ぢや許して下さるんですね。」私の語尾は思はず戦(ふる)へた。

「ほんとに何とも思つてやしませんわ。だからもう、こんな話はよしませう。私厭だわ。何もかも知つていらつしやる癖に。——」

私は虚を衝かれた人のやうに、もう一歩も踏み出せなかつた。が、たとへ少しでも自分の心持を云つて了つた後では、又たとへ操られてゐるのにしても、彼女の答が好意を暗示するのを知つた後では、重荷が下りたやうな気がした。

両者の間では博覧会の「あの事」、「あんな事」だけで会話が通じているのだから、それが澄子の手を取ったことを指していることは了解されているということである。特に文脈もなく人の手を取るということは尋常なことではないので、それなりにインパクトのある出来事だったということだろう。

澄子は取られた手を離したのをびっくりしたからだとした上で、声を落として「ほんとは嬉しかつた」と言っている。声を落とすのは姉に聞こえては困るということであろうから、澄子は少なくとも姉が言っていたような無邪気な少女ではなく、それ相応に成長した女性と考えるべきである。その上で、男をつなぎとめるためには方便は厭わないというのなら、澄子は相当なやり手であり、久米をしてコケティッシュと言わしめるに十分である。

しかし、本論でこれまでも示したような Status-seeking な女性であるとしたら、合格可能性のある人間を手放さないためには当然言っておくべきことでもある。試験が終わって合格発表を待っているこの段階は、まさに健吉と健次を天秤にかけている真っ最中なのであって、ここで健吉を手放してはいけないからである。

澄子が帰った後に、とうとう健吉は本心を姉に明かしてしまう。以下はその場面の叙述である。

後は又姉と二人ぎりになつて了つた。
「どう？ 神經衰弱は癒つて？」突然姉は笑ひながらかう聞いた。私は不意を打たれた。そして思はず、
「え？」と聞き返した。
「もう二度は云はなくつてよ。」姉は戯弄ひ顔に云つた。
「姉さん、そんな事云ふもんぢやありません。」私は哀願するやうにかう咎めながら、先刻から引続いた感傷で涙ぐんだ。
　姉は吃驚して正面に振り向きながら、私の只ならぬ様子を見ると、笑ひかけてゐた顔を、真顔に直した。今度こそ姉の前で、私はどうしても一歩進まざるを得なかつた。
「姉さん。」私は間を置いて続けた。「そんな事を云つて、戯弄(からか)ふのはよして下さい。僕はとうから姉さんに打ちあけて、是非お願ひしようと思つてたんです。――僕はほんとに澄子さんを思つてゐるんです。そして出来るなら、行く行く結婚したいと思つてるんです、出来るなら今からでも、許婚にして貰ひ度いんです、どうでせう姉さん。一つ貴方から澄子さんのほんとの心持を聞いて、向うへ話して下さる訳には行かないでせうか。――僕は浮気やいたづらで、こんな事を云つてるんぢやないんです。真面目で云つてるんです。だからどうか姉さんも、本気になつて助けて下さい。お願ひします。ほんとにお願ひします。」私は興奮に釣られながら、涙を流して一気に云つた。
　姉は当惑さうな色を浮べて、黙つて首垂れて聞いてゐた。そして長い間考へ込んでから顔を上げた。
「その問題はね。健吉さん。」と姉の言葉はなぜか涙声で濁つた。「それは私も少し前から考へてゐました。決して私も悪いやうにはしない積りでしたよ。今だつて貴方の心持にはほんとに同情してゐます。けれどもねえ健吉さん、私も世間並な事を云ふやうだが、いかにもまだ貴方の身には早過ぎますよ。これが大学へ入つてからとか何とか云ふんなら、まだしも話ができますけれど、何分まだ貴方だつて入学試験を受けてる身ぢやありませんか。でもそんなに思ひつめてゐるんなら、ようござんす。せめて入学試験の結果が解つて、高等学校へちやんと入つてからになさい。そしたら私も話して見ませう。できるだけ尽力もしますわ。――入学試験の結果つて云へば、もう直

ぐ解るんぢやありませんか。兎に角この問題は、当分私の胸一つに収めさして下さい。それが一番いゝでせう。ね、さうして下さい。私の心がよく解つて？」姉の言葉に少しも不道理はなかつた。

かう云はれると私は、恥かしさと嬉しさと気遣はしさの中に、たゞ点頭くの外はなかつた。二人はその後永い間、凡てを云ひ尽した人のやうに、ぢつと黙つて坐つてゐた。

姉にからかわれたのをきっかけに、とうとう自分の本心を明らかにしてしまった。健吉は姉にからかわれると何かを暴露してしまう性分のようである。

姉の対応は、健吉も認めるほどにもっともなものである。いくら親戚筋の人間とはいえ、どうなるかも分からない状況の男を許婚として他人に勧めることは到底できない相談である。

しかし、姉が話を先に進めようとしないことには別の含みがあるようにも思われる。姉は健吉が高等学校に入ったら話をしてみてもよいといっているが、健次と澄子との関係を何も知らないわけでもない立場でもある。しかも、姉の言葉は「涙声で濁つ」ていたのである。これから起こる悲劇の重要な伏線と理解した方がよさそうである。

かつての言葉の通り、姉が澄子を単なる無邪気な子としてとらえている可能性はあるが、そうだとすると健吉にも健次にも悪くもない対応をしているということを意味してしまう。話をしてみたところで、うまくいくかどうかは分からないというくらいの気持ちであろう。どちらにせよ、健吉に順風が吹いているとは言い難いのである。

そうこうしているうちに高等学校の合格者が発表され、物語はクライマックスにいたる。次号はこの恋愛譚の結末を検討していく。

体験的文献紹介(20)

― 閑話休題Ⅰ　東京の私立女子高等学校 ―

神辺（かんべ） 靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

1966年3月、私は10年間勤務した東京文化高等学校教諭を辞めて4月から新設の東京立正女子短期大学の助教授になった。早稲田の大学院を修了してから10年間、教員としてまた校長代行の主事として勤めた私立女子高等学校である。その前3年間は非常勤講師として城右高等学校に勤めた。以後、私は短期大学と大学の教員になるので高等学校との縁は切れる。しかしこの13年間は私にとって青春時代であった。精一杯尽くしたと思うし自分を育ててくれたと思う。だが感傷にふけっていては能がない。私が勤務した昭和中期の東京の私立女子高校を教育史的に考察したい。

戦後の高等学校は戦前の中学校、高等女学校、農工商の実業学校を改編してつくったものだが、設置者別には国立、公立、私立の三種類があった。1955年、60年、65年の全国と東京都の公立私立別学校数と生徒数をみよう。

全国	公立高校数	私立高校数	公立高校生徒数	私立高校生徒数
年			万	万
1955	3.691	895	207　2,163	51　1,769
			万	万
1960	3.554	1,021	230　0,552	92　9,269
			万	万
1965	3.638	1,192	339　7,215	166　5,232

東京都	公立高校数	私立高校数	公立高校生徒数	私立高校生徒数
年			万	万
1955	118	250	14　1,833	14　1,023
			万	万
1960	129	253	15　9,324	24　4,689
			万	万
1965	144	259	20　9,316	37　1,584

文部省「学校基本調査」による

1955年は高等学校への進学率が50%を越えた年であるが、この時の全国高校生約258万人のうち東京都の生徒数は約28万人強で全国一である。次の年の7月、経済企画庁が発行した「経済白書」の中で〝もはや戦後ではない〟と敗戦の経済破綻からすでに抜け出したことを宣言した。日本の経済が本格的に立ちなおるのは池田内閣（60年7月）が所得倍増計画を発表し国民総生産が急上昇しはじめる65年からであるが、57年にはドイツの Autobahn をまねた日本列島を南北に貫くハイウェイ計画が日本道路公団から発表され、59年には〝夢の超特急〟新幹線が着工された。経済発展に不可欠の人間と物資輸送の大動脈ができようとしていた。高校生の進学率が50%を越え急上昇はじめたのはこのような時であった。

1960年代は戦後のベビーブームといわれた時期に誕生した子どもが高校生の年齢に達した時期である。それによる進学増加もある。また戦後の女性解放のムードに乗って女子の高校進学がふえた。果せなかった夢を娘に託す母親の願いもある。東京にはまた別の要因もあった。空襲によって廃墟と化した東京であったが闇市の盛況は人々を呼び寄せ、朝鮮戦争の特需によって、またたく間に立ち直った。戦争によって壊されたり焼かれたりした校舎も建て替えられ、どの高校も活性化した。漸く高まりはじめた大学進学にも有利と男子生徒が、よい就職口があると女子生徒が東京都の高校に集った。集ったのは高校生ばかりではない。戦後の東京には各種の会社や団体が出来たから各府県から専門職員が集り、その子どもも東京の学校に入るというわけで東京の学校はいずこも満員であった。当時の小学校・中学校が〝すし詰め学校〟と評されたゆえんである。東京都は1948年から旧制中学校、高等女学校、実業学校を新制高等学校へ移行させ、49年度には総合制全日課程を中核とする都立高等学校108校をつくった。しかし新制高校の目玉の一つ男女共学制はかけ声だけに終った。今では信じ難いことだが、男子生徒が共学を避けたからである。女生徒の学力が男子に及ばないと思ったらしいのである。これに対し意気軒昂と男子校に入学した少数の女生

徒はいずれも成績がよく難関大学に進学して男生徒の鼻をあかしたと当時の高校長は語っている（『戦後東京都教育史』）。

東京都の私立高校は1948年、256校が開校した。全国の都道府県で私立高校数が公立高校の2倍を超えたのは東京都だけである。私立高校の多い大阪府も79校で東京都には遠く及ばない。しかし東京都の私立高校は設置形態が著しく多様であった。まず男女共学校がなかった。当時の父母一般に思春期の生徒に共学はよくないという思考があったので男女別学が受け入れられ、中学校、高等女学校がそのまま昇格した形で男子高、女子高と通称された。都会の〝女子高生〟には新鮮とか素敵（すてき）というニュアンスがあって、もてはやされたものである。男子高、女子高ともに中学校を附設していた。

東京の男子高校には私立大学の附属とされるものが多かった。これらの男子高の前身は戦前の私立中学校である。戦前の中学校はすべて旧制高校、大学予科、専門学校への進学学校であったが、東京に限って言えば戦時体制の中で府立中学校の大増設が行われ、進学教育のお株を府立中学校に奪われてしまった。私立中学は府立中学の落第生を引き受け、気息奄々（きそくえんえん）の状であった。そうしたなかにあって武蔵・成蹊・成城の七年制私立高等学校が四年制の尋常科を持ち、私立大学の中にも附属中学校を持つものがあった。これらの附属中学校が戦後の改革で附属高校になったので、倒れかかった私立中学校の多くも有力私立大学の附属高校として蘇生したのである。

以上は極く大ざっぱにみた東京の私立高校である。細かくみるならば旧東京市内と市外に分けてみるがよい。現JR山手線内の私立高校と線外のそれは違うのである。山手線内の私学は概ね明治以来の学校で名門校として名が通っている。山手線外のそれは概ね大正大震災後、帝都復興のかけ声で山手線の基幹駅（ハウプトバンホーフ）から放射線状に伸ばした私鉄の沿線につくられた私立学校が多いのである。私の勤務校・東京文化高校はJR中央線の中野駅近く、かつて世話になった城右高校は阿佐ヶ谷駅近くにあった。いずれも大正末期か昭和はじめの創立である。当時、このあたりは東京郊外で畠や林の間に新築家屋

が点在していた。そこに東京市内の中央官庁や会社の若手官僚や会社員が押し寄せ、新興住宅地に変貌したのである。この勢いは戦争末期に一時衰えたが、戦後復興で息を吹きかえし、忽ちのうちに大住宅地になった。中央線沿線の私立高校がいずれも繁盛したのはその子弟が入学したからである。東京文化高校で言えば発足時の1950年、全生徒209人であったものが5年後には459に倍増し、10年後の60年には799人になった（『東京文化学園50年史』による）。1947年48年生れのいわゆるベビーブーム期生れが高校生になる62年、63年の新入生はおびただしく、従来の一学年4クラス編成を7クラス編成にしなければならなくなったほどである。東京都は急増する高校進学者に対し都立高校の増設でなく私立高校へ頼る方針をとった。私立高校側はこれを受けて「東京都私立学校助成条例」（1951年成立）により多額の助成金を受けて校舎教室を増設した。こうして東京都は高校生急増の危機を切り抜け、私立高校の多くが大規模校になったのである。

『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項（2015年6月15日現在）

1.（目的）広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。

2.（記事のテーマ）記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。

3.（刊行頻度・期間）研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。

4.（編集委員会・編集世話人）発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は冨岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。

5.（執筆者）執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。

6.（記事の責任）記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。

7.（記事の種類・分量）記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。

8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少部数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

学生のときからの友人の紹介で、邉見公雄氏（特定非営利法人 地域医療・介護研究会JPAN会長、一般社団法人全国公私病院連盟会長）に面会する機会を得たので、面会の前に同氏の著書『令和の改新　日本再輝論』（幻冬舎、2020年）を読んだ。邉見氏は約30年間にわたって兵庫県の赤穂市民病院の外科医長・病院長として地域医療を支えてきた経歴を活かし、「本当の国難は人口減少」という持論から、医療と教育と一次産業の活性化による地域づくりを提唱している。教育と医療は人を扱う事業であり、警察や消防と同じく採算を考えるべきでなく、教育にもっと金と人を国から入れるべきだと主張する。なるほど、そのように考えると大学を含む学校をよりよくしようと考えるときに、地域づくりという面で医療の取り組みを知ることで連携できるかもしれない。

例えば、邉見氏は院長になったときに、「病院祭」を始めた。祭を楽しむことで、職員の一体感を醸成するとともに、地域住民が病院を身近に感じて「おらが病院」という意識を共有するようになることが目的であったという。邉見氏は「病院とは病気の人を治すだけでなく未病を治す、つまり予防とか先制医療、性教育や衛生学を教えたり健康増進などもやる〝健院〟を目指すべき」「人生100年時代は健康増進と病気治療を行う施設こそコミュニティセンターになるのが望ましい」と述べる。この「病院祭」をヒントにすれば、大学祭も、学生が楽しむだけでなく、もっと地域の人に大学を身近に感じてもらうという方向で充実させることができるかもしれない。そして、地域のために「祭」をやる機関が協力しあうこともできるかもしれない。

また邉見院長は、病院職員に「どんな逆境にあっても輝いたふりをしてほしい」と呼びかけ、「医療安全いろはかるた」を考案して病院で流行らせたという。そのような試みを続けているうちに、いつしか「輝いたふり」ではなく本当の輝きになったという。

このことも参考になる。学校の教職員も、逆境の際にはまず「輝いたふり」から始めてみるのも良いかもしれない。（冨岡）

会員消息

実は、師走な年末に職場の自身研究室で急な出血し、2週間ほど入院して手術もいたしました。職場をはじめ、関係者の皆さんには、たいへんなご尽力ご配慮をいただきまして感謝いたします。幸い退院後には、念願であった大学研究室にて暫し思いに浸れる・・ほどに、気力体力と本人的には回復した感じです。ただ自身体調への戒め？もあって、冨岡さんにムリいって、入院中はNLをお休みさせていただきました。申しわけありません。

（谷本）

11月14日（土）に日本生涯教育学会第41回大会生涯学習政策研究フォーラムに参加した。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、学会大会がオンラインでの開催になり、同フォーラムもZOOMを活用したオンライン開催となった。フォーラムのテーマとして、「コロナ禍を超える生涯学習推進」が設定され、省庁、教育関係者、大学関係者などが登壇し、報告・議論がなされた。なお、学会大会における会員の研究発表に関しては、発表要旨集録への掲載をもって発表に代える措置がとられ、筆者も自由研究部会・生涯学習実践事例研究部会の2つの部会で紙上発表を行った。次年度は、宮城県仙台地区の実施が予定されている。（八田）

またしても、久方ぶりの会員消息となってしまいました。今年の6月より勤務させていただいている早稲田大学大学史資料センターでの業務も開始してから半年となりました。今年を振り返ってみますと、大学での授業はほとんどがオンラインで、長いようで短い特殊な一年でありました。来年は状況が改善し、また多くの先生方とお会いすることができるようになればと思います。（雨宮）

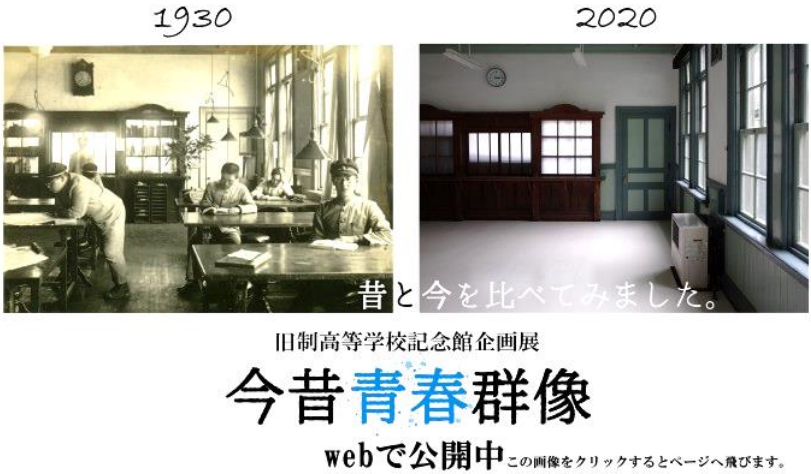
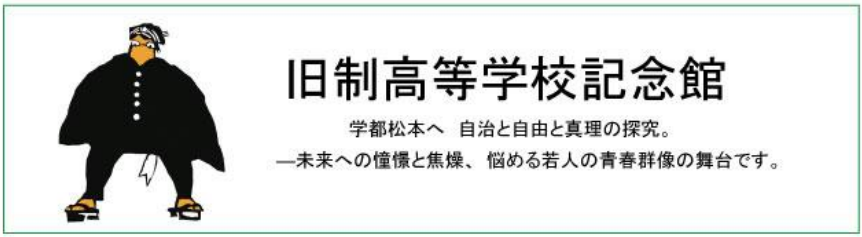
今年度は、さまざまな業務に追われた年でした。来年の授業も遠隔授業が中心になるかもしれません。できる範囲でよりよいものにしていきたいです。研究のほうは、だいぶ遅れていますので、なんとか時間をみつけて進めていきたいです。（山本）

「短評・文献紹介」に書いたように、このあたりで私自身も「輝いたふり」をしてみようかと思います。状況が許せば、3月20日と4月25日のオーケストラ付演奏会に合唱で出演します（3月20日の演奏会チラシを30頁に紹介）。

また、旧制高等学校記念館のホームページを久しぶりに見たら、Web企画展（31頁）を開催中でした。なるほど、新型コロナウィルス流行の中でのWeb企画展は良い方法ですね。（冨岡）

マタイ受難曲
BWV244
ヨハン・ゼバスティアン・バッハ 作曲
～イエスは今何処に～
延期公演
この公演は2020/3/14の延期公演です
京都・バッハ・ゾリステン
特別演奏会2020
2021
3.20 土
［春分の日］
開演 14:00　開場 13:00
京都コンサートホール
大ホール
京都市営地下鉄烏丸線「北山」駅下車
1番または3番出口 南へ徒歩5分
入場料［全席自由］
一般 5,000円　学生 2,500円
※2020.3.14のチケットは有効です。
指揮　福永 吉宏
福音史家／テノール　畑 儀文
イエス　篠部 信宏
ソプラノ　松田 昌恵　畑澤 紘
アルト　安永 紀子　米谷 優
バス　成瀬 当正
管弦楽　京都・バッハ・ゾリステン
合唱　京都・バッハ・ゾリステン
京都フィグラールコール
かたばみアンサンブル（江戸川女子高等学校合唱部OG）
［チケット取扱］
京都コンサートホール　チケットインフォメーション　☎ 075-711-3231
10:00～17:00　休館日：第1・第3月曜日（休日の場合はその翌日）年末年始
JEUGIA三条本店3F APEX管弦楽器　☎ 075-254-3750
平日11:30-20:00, 土日祝10:30-20:30
［お問い合わせ］
京都・バッハ・ゾリステン　☎ 090-8937-1207　✉ kbs@inter-art.gr.jp
※未就学児のご入場はお断り致しております。
また出演者は予告なく変更される場合がございます。ご了承ください。
KYOTO
BACH
SOLISTEN
2021

［旧制高等学校記念館 Web サイトより
http://matsu-haku.com/koutougakkou/］



企画展「松高人名録（その二）」、そのバックナンバーである「松高人名録（その一）をホームページ内でPDFデータの閲覧ができます。ぜひご観覧ください。